

バルジの戦い50周年 ラインの守り



THE BATTLE OF BULGE

十夢の再来

「第19軍団の全将兵に告ぐ！われわれはベルギー、フランスで17日間を戦ってきた。いまやここに、故国ドイツの国境をへだたること600km、一路英仏海峡に達し、大西洋を望んでいる。



この間、諸子はベルギーの築城陣地を突破し、マースを渡河、記念すべきセダンの会戦では“マジノ線”突破を強行し、ストンスの重要高地帯を攻略、さらにサン・カンタンとペロンヌを迅速に占領し、アミアンおよびアベヴィル付近のソム下流を制圧した。また、ブローニュおよびカレー両海岸要塞を含む海峡沿岸の占領は、諸子の偉業にさらに輝きを加えたものというべきである。

わがドイツは、このような装甲部隊を持つことに誇りを抱くであろうし、優れた諸子を指揮することのできた私は幸福である（以下略）。

1940年5月10日、ドイツとルクセンブルクの国境を越えたH・グデーリアン將軍の第19軍団、そしてその北のラインハルト將軍の第41軍団の各機甲、自動車化師団はフランス、イギリス連合軍の裏をかき、戦車の運用が不可能とされていたアルデンヌの森林地帯を走破し、セダン、モンテルメを経て短期の内に北西海峡部ダンケルク方面に達した。上記はこの時期、グデーリアンが部下の兵士達の戦功に対して発令した軍団命令の抜粋で、彼が初めて実践したスピーディーな電撃戦の様子をよく伝えてくれている。

しかし、このフランス戦の大勝利の後、ドイツ軍は独

作戦

ドイツ軍最後の大攻勢！

伊藤裕之助

ソ戦、北アフリカ、ノルマンディー上陸に続く連合軍のヨーロッパ解放の戦いと、二正面作戦の混沌とした中で次々と敗北を重ねていった。そして1944年12月初めの時点で、東部ではロシア軍がハンガリー、ポーランドのワルシャワ、東プロイセンの正面にまで迫り、アイゼンハワーのヨーロッパ遠征軍は、北にモントゴメリーの第21軍集団がルール工業地帯へ向けて攻勢を準備、南のブラッドレーの第12軍集団もザール方面へ前進を続けていた。

ちょうどこの巨大な戦力を有する2コ軍集団の境界のような場所にあったのが、1940年の春にドイツ軍が主攻勢をかけたアルデンス高原の森林地帯で、そのアメリカ軍兵力は手薄であった。

それまでの幾多の会戦で、職業軍人いわばプロの集団である参謀本部や将帥達の意見では非常識とみなされるような、戦略的な“カン”を頼りに大きな成功と失敗を重ねてきたヒトラーは、この戦局も大詰めに入ってきた1944年の末に大きな賭けに出ることにしたのだった。

ドイツ軍最後の大攻勢“ラインの守り”作戦の舞台となったのは、両指揮官を筆頭に何かと確執が絶えず、決して良い協調関係とはいえなかった連合軍2コ軍集団の間隙ともいえるルクセンブルクとベルギーの国境地帯で、ヒトラーは4年半前に目覚ましい活躍をみせた機甲師団群にすべての可能性を賭けたのだった。

その強力な機甲戦力がスピアヘッド（槍の穂）として奇襲攻撃の要素を十二分に発揮し、まず手薄なアメリカ軍正面陣地を蹂躪し、その勝利の勢いで戦略的に重要な港であるアントワープまでアメリカ、イギリスの戦線を突破しながら一気に達して両陣営を分断、崩壊させるのが彼の頭に最初に描かれた大構想で、この時彼にはかつてのフランス電撃戦での鮮やかな勝利がオーバーラップして浮かんでいたことだろう。

第5機甲軍司令官マントイフェル大将（中央）



ティーガーIIに跨乗したドイツ軍兵士

そしてヒトラーはこのプランを現実のものとし、連合軍がよもや攻勢はあるまいと思われたこの戦域へ、厳重な秘匿のもと続々と再建あるいは補充のなった機甲、擲弾兵師団を集結させていた。

十兵力の集中

ヒトラーはこの乾坤一擲の攻勢のために、集められる限りのすべての兵力をこれにつぎこむ意気込みで計画を立案し、機密保持にも万全を期していた（例えば11月10日以降はドイツ軍兵士が敵の捕虜となって機密が暴露されるのを防ぐため、すべての偵察行動を停止させたり、忠誠度の疑わしい兵員をチェックする等のことを行なっている）。

何よりも、この作戦の第一段階を成功させるいちばん大きなファクターは奇襲にあり、これは攻撃開始前のドイツ軍の異常な努力によってほとんど成し遂げられることになる。そして、もうひとつの大きな成功へのファクターは、連合軍航空戦力の状況にあった。

この空からの猛攻に対しては、北アフリカ、イタリア、ノルマンディーと常にドイツ軍は圧倒されて、移動はもとよりドイツ軍の得意とする機動戦の可能性をつぶされてきたが、このアルデンス攻勢では、悪天候による航空

B軍集団

(ヴァルター・モデル元帥)

SS第6機甲軍

(ゼップ・ディートリヒSS上級大将)

SS第1機甲軍団

(ヘルマン・ブリースSS大将)

SS第1機甲師団

SS第12機甲師団

第277国民擲弾兵師団

第12国民擲弾兵師団

第3降下猟兵師団

SS第2機甲軍団

(ヴィルヘルム・ビットリッヒSS中将)

第2SS機甲師団

第9SS機甲師団

第67軍団

(オットー・ヒッツフェルト中将)

第272国民擲弾兵師団

第326国民擲弾兵師団

軍直轄砲兵部隊

第388、第402、第405国民砲兵軍団

第4、第9、第17国民ロケット砲兵旅団

第1110、第1098、第1120、第428重迫撃

砲大隊

第1123攻城重砲大隊

軍直轄突撃砲部隊

第394、第667突撃砲旅団

第217突撃戦車大隊

第683戦車駆逐大隊(牽引式)

第519重駆逐戦車大隊

軍直轄工兵部隊

第62、第73、第253工兵大隊

第54、第798建設工兵大隊

第655架橋工兵大隊

第175、第844、第851、第895J型架橋中隊

各工兵大隊より抽出の5コB型架橋中隊

トート機関4コ労役大隊

第5機甲軍

(ハッソ・フォン・マンティフェル大将)

第58機甲軍団

(ヴァルター・クリューガー大将)

第116機甲師団

第560国民擲弾兵師団

第47機甲軍団

(ハインリヒ・フォン・リュトヴィッツ大将)

第2機甲師団

機甲教導師団

第26国民擲弾兵師団

軍直轄砲兵部隊

第401、第410、第766国民砲兵軍団

第7、第15、第16国民ロケット砲兵旅団

第460補助砲兵大隊

第1094、第1095補助攻城砲兵大隊、第975砲兵連

隊、第25攻城重砲大隊

第1119、第1099、第1121、第638重迫撃砲大隊

軍直轄突撃砲兵部隊

第244突撃砲旅団

第653重駆逐戦車大隊

軍直轄工兵部隊

第600、第207工兵大隊

第803、第999建設工兵大隊(第3軍管区)

第850、第846、第894、第892J型架橋中隊

各工兵大隊より抽出の4コB型架橋中隊

トート機関4コ労役連隊

第7軍

(エーリッヒ・ブランデンベルガー大将)

第85軍団

(バプティスト・クニース大将)

第5降下猟兵師団

第352国民擲弾兵師団

第80軍団

(フランツ・バイヤー大将)

第276国民擲弾兵師団

第212国民擲弾兵師団

第53軍団

(フリードリヒ・ヴィルヘルム・フォン・ロートキ
ルヒ大将)

第13軍管区第999要塞守備(懲罰)歩兵大隊

第44要塞守備機関銃大隊

軍直轄砲兵部隊

第406、第408国民砲兵軍団

第8、第18国民ロケット砲兵旅団

第1092、第1093、第1124、第1125重砲兵大隊、第

6補助重砲兵大隊

1122迫撃砲大隊

軍直轄対戦車砲兵部隊

第501固定戦車駆逐大隊(要塞)

第657、第668戦車駆逐大隊(牽引式)

軍直轄工兵部隊

第47自動車化工兵旅団の2コ大隊

第677建設工兵大隊

第605橋梁建設大隊

第964、第965、第966、第961B型架橋中隊

第974J型架橋中隊

トート機関2コ労役連隊

第15軍(ただし作戦参加部隊のみ)

第9機甲師団

第15機甲擲弾兵師団

B軍集団直轄部隊

第3高射砲軍団

(ヴァルフガング・ビッケルト空軍中将)

第2高射砲旅団=第15軍へ配属

第19高射砲旅団=第5機甲軍へ配属

第15高射砲連隊=第7軍へ配属

第79国民擲弾兵師団(軍集団予備)

軍集団直轄砲兵部隊

第725列車砲大隊

第674、第688、第749列車砲中隊

軍集団直轄工兵部隊

第813機甲工兵中隊

第888、第921、第969、第956B型架橋中隊

第226除雪中隊

トート機関2コ労役連隊

配属された総司令部予備部隊

第3機甲擲弾兵師団

第9国民擲弾兵師団

第167国民擲弾兵師団

総統擲弾兵旅団

総統護衛旅団

備考ドイツ軍機甲師団の平均戦車数は100輜程度で連合軍装甲師団の平均の50%。ドイツ軍歩兵師団の兵員数は10,000名程度で連合軍歩兵師団の兵員数の70%程度

支援のないことがドイツ側に大きく有利に働くはずで、事実作戦発動後数日間はそのとおりになった。このために、ドイツ軍機甲師団は空からの脅威を心配することなく動きまわることができたのだった。

しかし攻勢開始前、この最後の賭けを成就させるために解決されねばならぬ大きな問題点がいくつかあった。まず作戦の前提となるヒトラーが最初提示した攻勢の主目標は、ディートリヒ將軍の第6機甲軍が北東へ突き進み、リエージュとユイの間でミューズ河を渡りアントワープまで進出、マントイフェル將軍の第5機甲軍がそれよりも南に位置し、やはりひと回り大きく迂回してディートリヒの軍の南側面を守るような形でブリュッセル方向へ進むという遠大かつ楽観的なものであった。

これは、モデル元帥やマントイフェル將軍など歴戦の将帥には、実現不可能な机上のプランとしかうたらず、彼らは明確にヒトラーの承認を得たわけではなかったが、その主目的をミューズ川東方の連合軍部隊の捕捉撃滅という観点で計画を縮小していく方針となっていく。

その他マントイフェルの進言で変更となった攻撃時刻（当初の案ではAM7:30攻撃開始だったが、同5:30に選り抜きの突撃大隊が援護射撃なしで敵陣に侵透していく計画に変更、第一段階における作戦成功への大きな要因となった）、ガソリンの絶対量に対する不足への不安、兵士達の訓練未熟、徹底した機密保持による各部隊への伝達の不徹底など、不安要素はまだあったが、それでも攻勢開始の12月16日までには必死の努力で準備を一応整え、戦車兵、擲弾兵、降下猟兵達はこの最後の攻勢の勝利を確信し、士気も高く陣に待機していた。

ドイツ軍の配置はドイツ・ベルギー国境のモンシャウから南へ下ってルクセンブルクの東端エヘテルナハを結ぶ80kmのライン上に、北から攻勢の主軸となるはずのSS第6機甲軍（主力は北からSS第12、第9、第2、第1の各機甲師団）、そして作戦過程で主軸となって行動することとなる第5機甲軍（主力はやはり北から第116、第2、機甲教導の各機甲師団）、その両翼には擲弾兵、降下猟兵師団4コからなる第7軍合わせて約20コ師団であった。戦力については20万程度の兵員、戦車はIV号、パンター戦車、その他突撃砲、自走砲を主力とする600輛、各種砲、ロケット砲1900門を有していた。

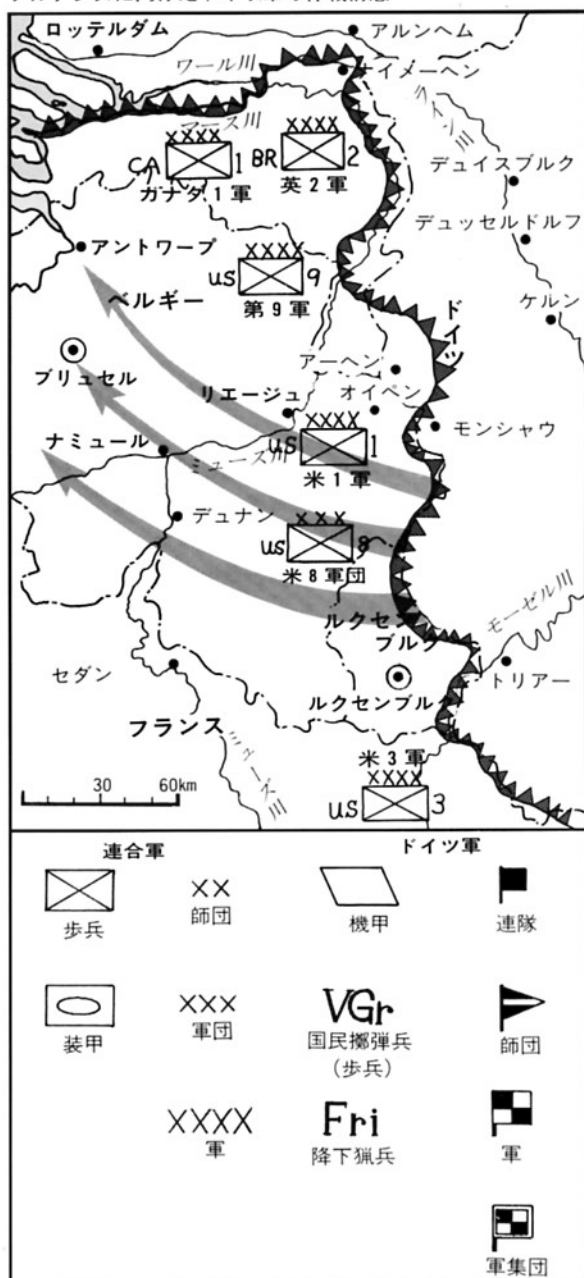
この正面攻撃を一身に受けることになるミドルトン少将のアメリカ第8軍団は、戦闘で打撃を受け休養中の歩兵2コ、まだ戦闘経験のない歩兵2コの計4コ歩兵師団約8万からなっており、4年半前のフランス戦時の意表を突いたドイツ軍の優れた作戦計画に対する教訓を全く考慮に入れておらず、また現地住民のドイツ軍部隊集結の証言をはじめとする攻勢を匂わせる各種警告をも一切

無視していた。連合軍情報部のこの過失は、やはり非難されるべきであろう。

いずれにしても、あれほど優秀だった連合軍の情報機関の裏をかいたという事実は、この攻勢が連合軍にとってどれほど意外で意表をついていたかの大きな証明となるだろう。

✦奇襲、見事に成功！

アルデンヌに向けたドイツ軍の作戦構想



ドイツの機甲部隊はノルマンディー戦以来大損害を受けていたが、戦いつつ再編されていった



1944年12月16日早朝、西部戦線ではかつて見られなかった大量の各種火砲の支援のもとで攻勢が開始された。北翼の主役を担ったディートリヒのSS第6機甲軍の攻撃は、パイパー、ハンセン、ミュラーなど歴戦の将校達によって指揮された機械化戦闘集団を先鋒に立てて、何の警戒もしていなかった弱いアメリカ軍陣地を蹴散らしていった。

彼らの前面にいたのは、まだ実戦経験のないアメリカ第99歩兵師団で、攻撃当初は奇襲の効果も相まってかつての電撃戦を思わせる快進撃ぶりであった。しかし、この精鋭機甲軍の突破は、もともと危惧されていた峠や高台を含めた地形的な困難、そして最初のカウンター・パンチを喰らった後のジェロウ將軍配下のアメリカ第5軍団各師団の立直りの素早さ、それにともなう各拠点の粘り強い抵抗によって、早くもその日の午後には遅滞ぎみとなっていくのである。

いずれにしても、この方面のドイツ軍は16～20日にかけて北端の第67軍団も含めモンシャウ、エンゼンボルン峠、ブートゲンバッハと要衝リエージュにいちばん近接した戦線では、各拠点のアメリカ兵達の強い抵抗もあってこのラインを越すことはできず、ただ一人、SS第1機甲師団の有名なパイパー中佐に率いられた戦闘集団とその第1戦車連隊第1大隊、SS第501重戦車大隊（ティーガーII装備）、SS第2機甲擲弾兵連隊第3大隊（機甲化）を中核とする完全な自動車化部隊が、アメリカ軍戦線を切断しながら一路スタブロー、そしてストゥモン方面へ向けて突進していた。

しかし、この1コ戦闘集団の破竹の攻撃も、19日のストゥモンへの一撃を最後にストップさせられてしまった。やはりこれも、アルデンス攻勢開始前から危惧されていたことだが、ドイツ軍の脆弱な補給態勢では他地域のア

メリカ軍の抵抗を支えながら、この突出した部隊に増援を送ることができなくなっていたのだ。

21日には孤立無援のまま包囲された同戦闘集団の脱出が検討され、それでも数日ねばった部隊は24日、燃料もなく動けなくなったすべての戦闘車輛を遺棄したSS兵達が徒歩で東への撤退を余儀なくされた。

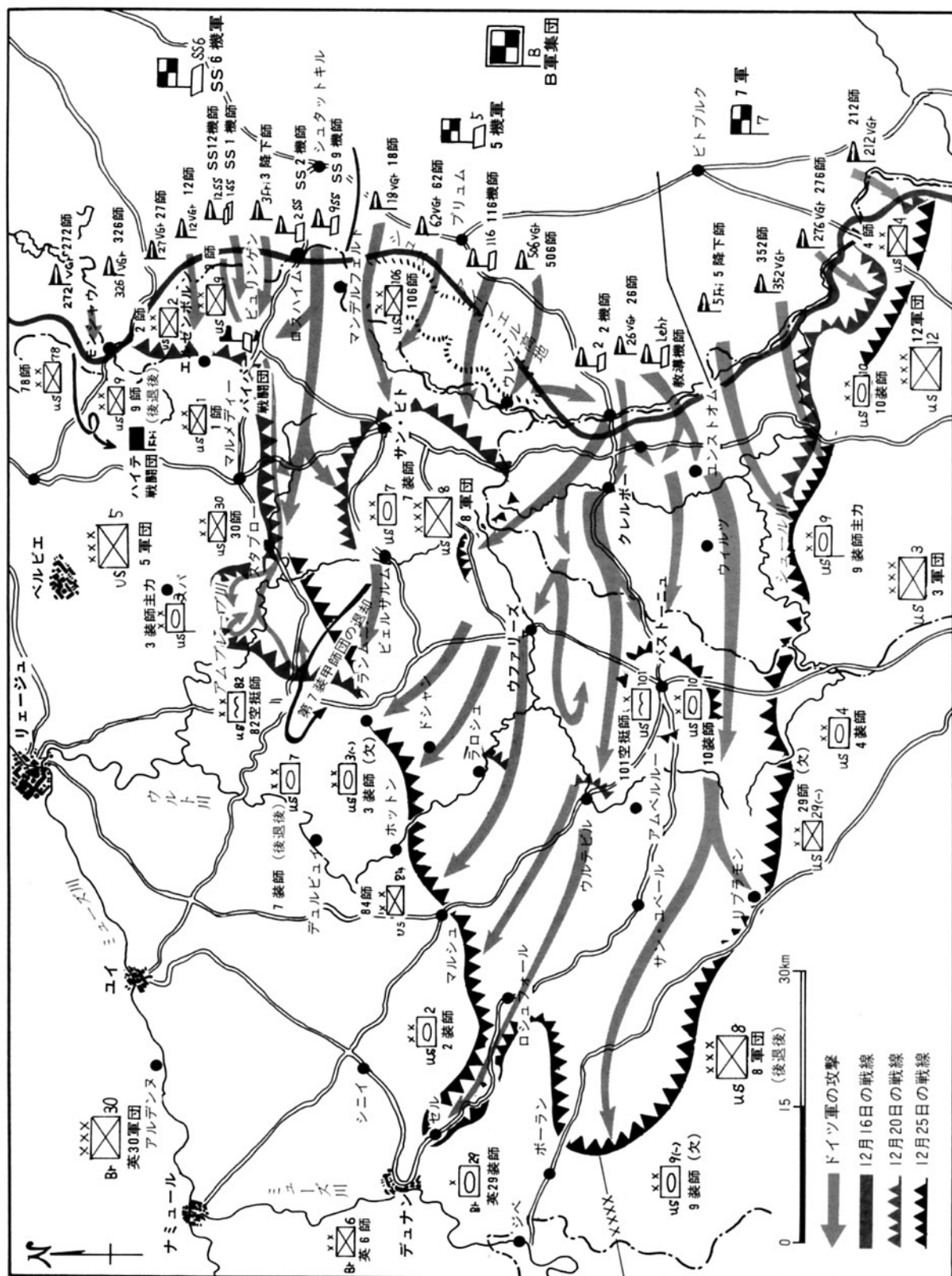
こうしてSS第6機甲軍の最後の希望は潰え、この先鋒部隊が象徴するようにディートリヒの担った北はモンシャウから南のアルデフェルトを結ぶラインの攻勢は、多くの損害を被りながら全体として停滞、頓座してしまっ

た。12月20日を境にして、大々的な突破の見込みがなくなったこのSS第6機甲軍戦区から、攻勢の重点はその南翼、マントイフェルの第5機甲軍へ移っていくのである。ドイツ軍は、この攻勢に持てるもの総てをつぎ込んだのだが、正攻法による攻撃以外にも特殊部隊による攻撃を2つ実施している。

ひとつは“ジュテッサー”作戦と呼ばれる空挺作戦で、歴戦のフォン・デア・ハイテ大佐指揮の戦闘集団が第6機甲軍の前進路にあたるホーヘ・ヴェンの道路、および各要地を確保しておくという計画だったが、その兵員の多くは予定地を外れて降下、何とか集合した降下猟兵達も前記のように第6機甲軍の進撃の鈍化によって完全に孤立し、降伏以外の道はなくなってしまった。

もうひとつの“グライフ”作戦は、かつてムッソリーニの救出で名をはせたオットー・スコルツェニーSS中佐の率いるアメリカ軍に化けたドイツ兵達が、やはりアメリカ戦車に化粧直したパンター、あるいは捕獲したジープに乗って第150機甲旅団を構成してアメリカ軍戦線を突破、ミューズ河にかかる橋を無傷で手に入れることであった。

“ラインの守り” 作戦におけるドイツ軍の攻勢





しかし実施してみると、その所期の目的を達成する舞台は訪れなかったが、そのために引き越されたパニック効果の方が敵に打撃を与えたようだ。

十混乱するアメリカ軍

「私が提案したことは、各師団において選り抜きの突撃大隊をひとつずつ作る（その将校は私が自分で選んだ）。これらの突撃大隊は、早朝5時半のまだ暗いうちに援護砲火なしに発進してアメリカの前哨陣地を突破する。彼らは深く進入するまで、できる限り戦闘をさける」。

マントイフェルが戦後に述べたように、攻撃時間を5時半としたことは、この戦区での攻撃成功の大きな一要素となった。東部戦線で幾多の戦術的偉功を示し、師団戦場に遺棄されたアメリカ軍のM55 4連装対空機関銃



長（エリートのグロスドイッチュラント師団）から一躍西部戦線の機甲軍指揮官となったこの若干47歳の気鋭の将軍に率いられた第5機甲軍は、ディートリヒの南翼マルデフェルトから南へ要衝バスターニュ東のウール川の線までを担当し、北から第116、第2、機甲教導の3コ機甲師団を主軸としてディナン、そしてミューズ川方向への突破が期待されていた。

12月16日、マントイフェルの計画どおり、まだ薄暗い内に濾過紙に水が浸透していくように、各師団の突撃部隊が不意をつかれたアメリカ軍戦線に侵入した。その援護射撃も要所要所を押さえた的確なものであった。

その北翼、ルヒト将軍の第66軍団戦区では、第18国民擲弾兵師団がやはり実戦経験のないアメリカ第106歩兵師団の陣を破って同士討ちを演じさせた。パニックに陥った同師団の第422、第423の2コ連隊約9000名はサン・ヴィト東で包囲され降伏、アメリカ軍はここでヨーロッパ戦線で最大の敗北を喫してしまった。

それでもアメリカ第7、第9装甲師団の増援を得たこの戦区は、サン・ヴィトを数日持ちこたえていたが、21日、ドイツ2コ師団（第18、第62）による総攻撃で、ついにドイツ軍が町に侵入した。

この拠点の北には、すでに攻撃の重点をこちらに移した第6機甲軍のSS第1、SS第9機甲師団が配置され、総統護衛旅団も含めてアメリカ軍を押していたが、このアメリカ軍防衛ラインは頑強に抵抗を続け、24日にドイツ軍はやっと突破に成功した。しかし第5機甲軍の攻勢当初、ドイツ軍がここで失った一週間が、後の作戦に

とってまず第一の大きな足かせになるのである。

一方、クリューガー將軍の第58機甲軍団の第116機甲、第560国民擲弾兵師団の攻撃はアメリカ第28歩兵師団戦区を突破し、ウーファリズから一路順調に西進していたが、軍団長の判断を誤った反転命令から時間をロス、（結果的にこれがミューズ河到達への可能性を殺してしまった）サムレーの糧食、燃料の集積地（ガソリン3万ガロン）を手に入れ、さらに西進を続けたが21日、オットンの攻略に失敗、結局このラインを越えることはできずに終わるのである。

✦バスターニュをめぐる戦い

リュトヴィッツ將軍の第47機甲軍団は、最南端の戦線を担当したドルンベルガー將軍の第7軍（第5機甲軍の進撃する側面を固める位置にあり、パットンのアメリカ第3軍と隣接していた）の北にあり、その第2、機甲教導、第26国民擲弾兵師団をスピアヘッドにして、やはりアメリカ第8軍団第28歩兵師団のアルナッハ、ホーゲンゲン、ワイラーなどの各拠点の抵抗を破りながら西進、17日にはクレルボーを陥とし、クレルヴェ川を渡河していた。

意気も高く西へ進むマントイフェルの兵達の前には、このアルデンス高原一帯を巡る道路が一点に集中する交通の要衝、バスターニュが控えており、それまで全く無名だったこの町は、この一連の戦いを通して世界中に知られることとなる。

事態がここにいたって、連合軍総司令部もこの攻勢が局地的な牽制攻撃ではなく、大反攻であると認識せざるをえなくなり、次々と投入できるだけの予備兵力を戦線



S S第6機甲軍司令官ディートリヒ上級大將（左）とS S第1機甲師団第1戦車連隊長ヨーヘン・バイパー中佐（右）

へ送り出していた。

攻撃をまともに喰ったアメリカ第8軍団のミドルトン少将は、まずその第9、第10装甲師団をいくつかの戦闘団に分け、バスターニュ前面に押し寄せるドイツ軍の波を防ぐ防波堤のような陣を構築、第12軍集団のブラッドレー中将にはアイゼンハワーの許可をえて連合軍総司令部予備の精強なパラシュート部隊、第82、第101空挺師団の派遣を要求、後者は進路変更などのゴタゴタがあったが、バスターニュに到着後直ちに戦闘に投入された。マッコーリフ准将（副師団長）のこのパラシュート兵達は、歩兵としてトラックでここまで送られ、英雄的な活躍を示すこととなる。

ドイツ軍は、その再来を夢んでいた往時の電撃戦などの進撃速度は望めなかったが、それでも第2、機甲教導

遺棄されたM3ハーフトラックの傍を征くバイパー戦闘団のSdKfz251ハーフトラック





アメリカ軍のM10駆逐戦車に偽装した第150機甲旅団のバンター戦車

の2コ師団はエネルギーにアメリカ軍各拠点の抵抗を打ち破き、機甲教導師団はロングビリー、マージュレー、そして19日にはバストーニュ正面のネッフェへ到達、そして第2機甲師団はバストーニュ南を一路北進していた。

ここでマントイフェルは、この師団をそのままバストーニュを素通りして西進を続けさせ、サン・ユベール方面まで向かわせてこの要衝の攻略を機甲教導、第26国民擲弾兵師団に任せただった（この決定もドイツ軍の犯した大きなミスで、ミューズ河、バストーニュと大いなる2つの目標を同時に攻略するほどの力は彼らにはなかったのである）。

こうしてバストーニュは四方からドイツ軍に包囲され

た状態となったのだが、その中の四隅に針ネズミのように陣を張ったアメリカ空挺隊員たちは、エリートで士気も高く、頑強に抵抗してドイツの2コ師団の攻撃をはね返し続けていく。

しかし幾波にもおよぶドイツ軍の攻撃を防ぎ続けていく中、包囲陣の中の18,000名の守備軍は逐次消耗していき、補給、とくに弾薬の欠乏が深刻になっていった。しかし彼らのこの屈強な粘りこそが、マントイフェルのタイム・テーブルを大きく狂わせていた。ここが背後に残されている以上は、第5機甲軍にとってミューズ河へ向かう上で、喉元にくらいついた大きな牙になりつづけ、補給もここを迂回するためにとどこおってしまう。そし



攻撃発起に備えるドイツ軍のⅢ号突撃砲G型



撃破されたドイツ軍のヘッツァー駆逐戦車。バストーニュの戦いを境に形勢は連合軍の有利へと逆転した

て南からは、パットン将軍の第4装甲師団がここを解放すべくしゃにむに前進していた。

22日、ドイツ軍の名誉ある降伏を勧告しに来た軍使に対し、有名な“ナッツNuts！（ばかたれ！）”の一語をしたためて返したマッコリーフの守備陣は、さらなるドイツ軍の攻撃に耐え続け、パットンの増援の到着、そして補給物資投下を保証してくれる晴天をひたすら待ち続けていた。

12月23日、ついに待ちに待った晴天が訪れ、241機のC-47輸送機が損害を受けながらも弾薬を始め補給物資のつまったコンテナを投下、何とか一息つくことができたが、それでもバストーニュの危機は続いており、この日の日没後もマルヴィーを巡ってドイツ、アメリカ両軍が死力をつくして戦闘を交えていた。

翌24日、クリスマスイブも晴天で、補給品の空中投下は続けられ、その日の朝、敢行された第15機甲擲弾兵師

団の第115機甲擲弾兵連隊を中核としたマウケ戦闘団の攻撃も、第502パラシュート連隊の活躍によって阻止された。

第26国民擲弾兵師団長ココット少将の言葉を借りれば、「最後の絶望的な試み」と述べている26日の最後の戦車攻撃も失敗し、町はこの日の午後4時45分、アメリカ第4装甲師団によって解放されたのだった。

十戦局の逆転と攻勢の終焉

このバストーニュの戦いを天王山に、形勢が連合軍とドイツ軍とで逆転しはじめたことは明らかであった。確かにこの町を素通りした南の機甲教導、第2機甲師団は遠く西進を続け、後者は全ドイツ軍中部隊が達した最西端、ミューズ川沿いの要衝ディナンの正面わずか数マイルのセレまで到達している。しかし、総てがここまでであった。マントイフェルは述べている。「…第2機甲師

最後まで維持されたドイツ陸軍将校団の高水準

伊達博昭

1939年9月、世界を相手に口火を切ったドイツ軍の攻勢は、有史以来最も精強かつ世界最強の陸軍国としての名を欲いままにしていた。しかし、史上空前の工業力・天然資源・人的資源を持つアメリカ・ソ連という超大国を敵とするに至り、いかにドイツが戦闘には無類の強さを発揮しても、限られた資源においては、到底太刀打ちのできるものではなかった。

1944年後半になると、いつ果てるとも限らない長い戦いで国力は著しく疲弊し、特にベテランの歩兵部隊の消耗には目を見張るものがあった。

人的資源が乏しいドイツにとって、このことは、軍全体の質の低下に繋がることを意味していた。

この頃になると、一般の歩兵部隊の平均年齢は40歳に達しており、不足した兵員の補充は、16歳以上の男子と、健康上の理由で不適格とされていた者にも及び、新兵として激しい訓練を施された。

そのことによって、新たに18コの国民擲弾兵師団を編成することができたが、兵員の質の低下をカバーすることはもはや不可能だった。

さらに、本来は直接的に兵の運営を担当する下士官において、幾多の激戦を勝ち抜いてきた強者や、有能な者は自動的に将校へ昇進しており、後任には、経験の浅い戦闘数値の低い者が任命されるケースが多くなってきた。

このことは、個々の白兵戦から組織的戦闘に至るあらゆる状況における戦術的柔軟性の発揮に支障をきたし、

練度の低い兵士を運用する場合には、致命的な問題となった。

例えば、何の掩蔽壕もない広々とした平原において、いたずらに正面攻撃をかけたたり、また、突破した陣地への側面攻撃として最も敏捷性と大胆さが要求される状況において、攻撃を躊躇して機会を逃すケースが多かった。結果的にドイツは敗北を喫したが、それでも戦線全体の崩壊に至らなかった原因は何だろうか。

それは、将校の能力がアメリカ・イギリス軍に比べ格段に優れていたからである。

ドイツ陸軍における将校の選抜基準は、肉体的・知的に最も優れた高学歴の青年の中から、慎重な検査によって選抜され、下士官としての教育を受けた後、優れた成績を示した青年は、士官候補生として本国の士官学校に配属された。また、その他には、先に述べた優秀かつ並外れた実績を示した兵士・下士官からも同様の措置がとられ、実績と能力を第一に考慮した人事体制がとられていた。そして彼らは、その時々々の戦況の正確な判断とそれに基づく大胆な決断がとれる能力を身につけるために、最低でも1年間の教育課程を保証されており、世界で最も徹底した教育を受けていたのである。このことはドイツ陸軍の伝統であり、1944年のこの頃になってもなお徹底されていた。

このことが、最後まで戦闘意欲を失うことなく、与えられた義務を忠実に履行する原動力になったのである。



擱座したSS第1機甲師団のティーガーII重戦車

団という「小指」が、24日にディナンから数マイルのところまで進んだけれども、それが前進の最大限で、しかも指は直ちに切り落とされた。

ヒトラーは12月末にいたるまでこのバストーニュ攻略に総てを賭けようとしたが、23日から続く晴天で連合軍の戦闘爆撃機ヤーボがまたもや思うままにドイツ軍地上部隊を掃討、制圧し始めた。さらに新手のアメリカ軍部隊と遭遇して消耗を重ねたドイツ軍は、燃料・弾薬を中心とした補給、器材、兵員の補充が続かず、もはや満身創夷となってよるめき始めていた。

12月31日、北のアルザス地方では、ストラスブール東でプラスコヴィッツ将軍のドイツG軍集団の第1軍を中心とした新攻勢“ノルトヴィント（北風）”作戦が実施され、新年1月1日にはアルデンヌに一度も姿を見せなかった戦闘機900機からなるルフトヴァッフェの大戦最前線上で撃破されたドイツ軍のIV号戦車



後の集団攻撃“ボーデンブラッテ作戦”が、オランダとベルギーの主力所の連合軍空軍基地に向けて敢行された。

しかしこれら一連の作戦も、アルデンヌ地方におけるドイツ軍攻勢の明らかとなった失敗を償うにはおおよばず、1月初めまで続けられた消耗したSS第9、第12機甲師団のノヴィル周辺を巡る北からの攻撃も、6日のヒトラーユーゲント師団の戦いを最後に潰えた。ここにドイツ軍のアルデンヌ攻勢は終焉し、ようやく攻勢にまわったホッジスのアメリカ第1軍の反撃で、突出したドイツ軍は包囲を免れるため潮が引くように撤退、アメリカ軍は、1月23日にはドイツ軍の出撃陣地となったウール川を越えたのである。

「戦役において、奇襲という原理に大いなる効果を求めようとするならば、奇襲に必要な手段であるところの果敢な行動、迅速な決意、長途の行軍を必要とする。しかし、これらの要件が間然するところなく具わっているにせよ、必ずしも所期の効果を収め得ないことは、奇襲戦法の雄と見なされている2人の将帥、すなわちフリードリヒ大王とナポレオンとの戦例について見ても明らかである」。

有名な「戦争論」を著したクラウゼヴィッツのこの言葉は、様々な面でこのアルデンヌの戦いにもあてはまるものである。クラウゼヴィッツは、さらにフリードリヒ大王がその急襲によって却って自らの首をしめ、事態を悪化させたことを記しているが、ヒトラーのこの戦いはその何倍もの規模でそれを再現させてしまった。

この大博打によって擦り減らした兵力は、もはや二度と補充がきかず、この後に凄惨な様相で展開されるドイツ本土での連合軍、ソ連軍との戦いにおいて、使える予備を全くなくしてしまったのである。